

前のものに全身を向けつつ

2020年6月24日

学長 末光真希

聖書：フィリピの信徒への手紙 第3章12節－15節

¹² わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。¹³ 兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、¹⁴ 神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。¹⁵ だから、わたしたちの中で完全な者はだれでも、このように考えるべきです。しかし、あなたがたに何か別の考えがあるなら、神はそのことをも明らかにしてくださいます。

人と神との出会いは、本来、とても個人的な出来事です。そして神と一度出会った人が礼拝に出席するのは、それは神と再び出会うためであって、人と出会うためではありません。しかしそれに関わらず、こうしてご一緒に、一か所に集まって礼拝を献げることの出来ることの何と嬉しいことでしょうか。信仰が、本来とても個人的なものであるにも関わらず、それが共に信ずる共同体の中で受け継がれてきたものであることを、このコロナの時代に、あらためて強く思っています。134年間、絶えることなく本学院で献げられて来た礼拝を、本年度もこうしてまた一堂に会して献げられますことをご一緒に喜び、ご一緒に神に感謝したいと思います。

学長に就任したとたん、新型コロナウイルス騒ぎの真ただ中に放り込まれました。多くの先生方から「大変な時期に学長をお引き受けいただいて…」とねぎらいの言葉をいただきました。たいへん有難く思いつつ、その都度、「いえいえ、こういう大変な時のために学長職というのはあるのですから」と、笑いながらお答えしてきました。

その言葉に嘘はないのですが、しかし責任ある立場に立つということは、たしかに本当に大変なことと日々思い知らされています。コロナ問題では、国や自治体は、命を守るか経済を守るかの二項対立のはざままで難しい舵取りを強いられていますが、キャンパスの中も同じです。極端に言うと、命を守るか教育を守るか、のような究極の選択に引き裂かれる思いを重ねながら、一つ一つの決断を行っています。そしてどんな決断を為そうとも、＜命＞派と＜教育＞派の両方から必ず批判が来ます。

こうした対応を続けながら、私の頭の中には四月の就任以来、ずっと一つの言葉が鳴り響いていました。“パッション”という言葉です。すでにご存知の方も多いと思いますが、“パッション”にはたいへん興味深いことに、およそ互いに似つかわしくない二つの意味があります。一つは、皆さん

よくご存じの<情熱>です。

もう一つは<受難>です。皆さんは「マタイ受難曲」というヨハン・セバスチャン・バッハが書いた大曲をよくご存じのことでしょう。主イエスが最後の晩餐で弟子たちと別れを告げ、ゲッセマネで捕らえられ、ピラトの裁判で死刑宣告を受け、十字架を担いでヴィア・ドロローサ(苦難の道)を歩み、ゴルゴダの丘で処刑された、その受難の物語を、管弦楽、声楽のソロ、そして合唱でつづる音楽劇です。このマタイ受難曲を原語で Matthäus Passion と言います。パッションは<受難>です。私が所属する日本キリスト教団仙台東一番丁教会—これは本学と同じ押川方義が設立した教会ですが—この教会では、毎年イースターの前日にこの「マタイ受難曲」を演奏します。2009 年からですから、もう 11 年になります。何を隠そう、この私が指揮者を務めているのですが、今年はコロナのために残念ながら演奏できなくなりました。私にとってはそのことも大きな受難なのです。それはともかく、パッション第二の意味は<受難>ということでもあります。

さて<情熱>と<受難>、このまったく似つかわしくない二つの意味を、一体どうして“パッション”という一つの言葉が持つのでしょうか。その秘密は“パッション”という言葉が根っこに持つ「自分ではどうにもならないこと」、「自分がまったくの受け身となるしかない出来事」という語感にあるようです。「突き動かされる情動」そして「降りかかる苦難」——これが“パッション”です。

希望に溢れる新学期、心高ぶっていたのは新入園児、新入生だけではなかったと思います。教職員の皆さんも、今年はどうな園児、新入生が入ってくるのだろう！と楽しみにしておられたに違いありません。ましてこの4月から宮城学院に赴任された教職員の方々は、まさに私がそうであったように、四月からどんな出会いがあるのだろうと、きっとワクワクしておられたに違いありません。その期待は見事にコロナによって裏切られました。私はそのことが残念で、残念でたまりません。これまた受難です。そして、その原因となった新型コロナが憎くて、憎くてたまりません。「コロナと共に生きよう」と昨今言われますが、私はなかなかハイそうですか、とは行かない気持ちなのです。コロナに負けてたまるか！という気持ちが沸々と湧いてきます。情熱です。私の心の中には四月以来、受難と情熱、この二つのパッションがいつも鳴り響いていました。

今、ご一緒にお読みしたフィリピの信徒への手紙第 3 章 12-15 節は、私の大好きな聖書の言葉の一つです。そして、このみ言葉は、コロナの下(もと)で戦い続ける私たち宮城学院教職員一人一人の気持ちを代弁し、そして強く励ます言葉であると思います。

「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。」先日、宮城県の新型コロナウイルスの抗体保有率が 0.03%と発表されました。私はこの数字を聞いた時に、正直、がっかりしました。じつはもっと高い数字が出ると思っていたのです。私は心のどこかで、宮城県は感染者も死者も少ないけれど、それなりの数の人たちが人知れず無症状のうちに感染し、それなりの数の人たちがすでに抗体を持っているはず——という、とても虫のいい期待を持っていたのでした。しかし 0.03%という数字は、そのような都合のよい期待を見事に打ち砕きました。私たちは新型コロナ感染に対して、コロナ騒ぎが始まる前とまったく同じ状態にあるのです。コロナとの戦いは長期戦になります。それはおそらく社会全体が集団免疫を獲得するまで続くのでしょう。本日のニュースでは、それは社会の構成員の 43%の人たちが抗体を獲得した時に達成されるといいます。もしワクチンがまったく開発されなかったとしたら、宮城県の人口 230 万人の 43%の人たちが抗体を持つには、一日 10 人の感染者が出続けたとして

270 年かかる計算になります。私たちにとっては天文学的数字と言ってよいと思います。もちろん、実際にはワクチンがおそらく数年以内に開発されるでしょうし、治療法も発達して致死率がもっと下がるでしょうから、たしかに 270 年は大袈裟です。しかし、当面の間、終わりの見えない戦いが続くことは間違いありません。まさに 既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません という覚悟を、私たちはこれから持ち続けなくてはなりません。

しかしこのみ言葉が当てはまるのは、何も抗体保有率の話だけではありません。私たち教職員が園児、生徒、学生に対して行っている様々な支援についてこそ、まさに当てはまるものです。私たちはこれまで、私たちが為し得る限りの支援を行ってきました。しかしこれでもう十分だと思ことは出来ません。パウロは次のように続けます。「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」 コロナ騒ぎの到来以来、次々と降りかかる幾多の困難な状況に直面しながら、宮城学院は、子ども園、中学・高校、大学、法人、それぞれに全速で走り続けてきました。後ろに過ぎ去ったことを振り返る時間はありませんでした。この「前のものに全身を向けつつ」の部分を、昔の口語訳聖書は、「前のものに向かってからだを伸ばしつつ」と訳していました。「前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目指して走る」、何と素敵なお言葉でしょう！今の私たちにぴったりの言葉です。

フィリピの教会に宛ててこの手紙を書いたパウロは、ローマの獄中にいます。獄中からこの手紙を書いています。しかし彼は獄中にいながら、走っています。何が彼を走らせているか。それはキリストの十字架です。キリストがパウロの罪を背負い、彼の身代わりとなって十字架に架かり給うた。この、主がお受けになったご受難<パッション>こそが、パウロを走らせる情熱<パッション>になっているのです。私たちもパウロにならい、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走るものとなりたと思います。